

# 草の芽句会たよるか、

NO,89  
28,1,7

大手門屋根に 一列百合鷗  
新春の城案内人声高し  
貞子

お年玉言葉少なき少年に  
冬の城足整えて坂登る  
純子

忘れ事増ゆるばかりの喜寿の春  
温かい七草粥を供えけり  
範子

稚さき児の大人言葉や初笑ひ  
若水を小さき掌にてすくひけり  
文子

不揃ひの投句用紙や初句会  
搦手にまわれれば冷たき風吹けり  
禮子

追憶の遠さを思ふ冬銀河  
燃やされていし枯れ菊の匂ひかな  
剋子

高瀬川水面輝く初日の出  
我が郷もまばらになりぬ冬灯  
貞

歳晩や奥宮にともす灯り見ゆ  
愛し人皆連れ去りて山眠る  
節子

いつになく齡感じつつ去年今年  
火上山冬の光の中にな  
芳子

出席者 川原 森 吉崎 馬場 小山  
投句者 大黒 真鍋 氏家 小林

今日は初句会。城山の空は青く晴れて寒とは思えない温かさである。丸亀城を訪ずれる観光客が一〇万人を超えたとか、今朝も観光バスが行列している。大手門付近では百合鷗の群れ。お正月の城山は清掃がなされて見違えるばかり。観光客を避けて帯曲輪から三の丸へ。「真向いに飯野山座す初景色」と、思わず呟く。梢には冬鳥が鳴き交わし、なにやら下萌えの気配が。部屋に帰ればお抹茶の用意がされていて、お世話係さんの心遣いに感謝である。今年も元気で城山の四季を楽しもう。これからも草の芽が続くことを願って止まない。

